

今月の谷口雅春先生のお言葉

言葉の力で子供の善性を引き出す

言葉には不思議な力がある

言葉というものは不思議な力を持ったものです。「あなたは温順おとなしい良い子ですね」と言いますと、その子供は温順おとなしくなります。「この子は悪戯いたずらツ子こで仕方しかたがない子ですよ」と言いますと、その子供はますます悪戯いたずらツ子こになります。これを言葉の力と申します。言葉というものは、それを聴く人の心に、その言葉のとおり的心を流し込む役目をするのです。

(光明思想社版『人生読本』315頁)

心に想うことが形にあらわれる

あなたが「何を想うか」と云うことはあなたの運命や、健康を如何いかにするかと云う力があるのであります。吾々われわれの心の中は「花園」や「花鳥はなばどり」みたいなものであります。そこに、どんな種たねでも蒔まくことが出来るのであります。心の花園に蒔く種は「思い」と云う種であります。心に何を「想う」かと云うことが心の花園に蒔く種を定めることになるのであります。(中略)「あの人は悪い人だから嫌いだ」と心で想いますと、「あの人が悪い人になってあらわれて来ます。「あの人は神の子

だから屹度善い人だ。私は好きだ」と思っていますと、その人は、屹度、あなたに深切な善い人になってあらわれてまいります。

(新装新版『真理』第1巻14頁)

思念と発声音と表情とが運命を左右する「トバ

吾々の実践生活の上では思念と発声音と表情とが最も重要な、善かれ悪しかれ吾々の運命を左右するコトバになっ

ているのであります。(中略)

そこで吾々は思念と発声音と表情とを実生活の上にかに応用するかが切実な問題となつて来るのであります。吾々は、自分の言葉の使い方一つで、心の持ちよう一つで、表情一つで、今まで暗く不幸であった日常生活が明るくもなれば、幸福にもなり、今まで病弱であった身体が健康にもなれば、常人以上の精力を発揮することが出来るようにもなり、衰えていた運命の開拓も徐々に意のままになつて来るのであります。

(新編『生命の真相』第1巻34～35頁)

善い言葉が善い運命を造り出す

吾々が「言葉の力」の法則に従つて何事でも行いいますならば、流れに乗つて川を行くようにズンズン速く進んで行くことが出来るのであります。「言葉の力」の法則に逆いますと、急流を逆にのぼつて行くようなもので、一所懸命、力をつくして努力していながらなかなか思うようにならないのです。

先ず自分に対して「私は神の子だ。何でも素晴しく出来る。私の運は必ずよい、神様が護つていて下さるのだもの」と、朝目がさめたとき自分の耳にきこえる声で自分自身に二十遍ずつ呼びかけなさい。これが「言葉の力」と云う法則を使う第一歩であります。それから起上がったら、顔を洗うにしても、ほこり叩きで払うにしても、箒ではき浄めるにしても、その間じゅう、顔を洗う水に、塵をはらうハタキに、座敷を掃く箒に……その他、何にむかつてでも「有難うございます」と口のうちで感謝の言葉をとなえるのです。あらゆる物に感謝の言

葉をとなえますと、それがすべての物を祝福する言葉になり、自分が祝福されることになるのです。これが「言葉の力」を使う第二步となるのです。水は川に流れていても、その水を漕がないと船は動かないのです。言葉の力が宇宙にみちみちていて、万物をつくっていても、貴方が、「言葉の力」で善い言葉をとなえないと、「善いもの」は出て来ないのです。

（新装新版『真理』第3巻112～113頁）

子供の「本当の自分」を引き出すために

人間の本性の尊いこと、その潜在能力の無限であることを子供の心に吹き込むようにすれば好いのである。すると、子供は次第に「本当の自分」が如何に崇高く霊妙なものであるかを知りはじめる。そしてその「本当の自分」を実現することが彼の生涯の理想となり、従来の小さな虚栄や、小成に安んずる慢心や、狭い利己心は消滅して、本当に彼は謙虚な心持で生長の本道を辿り得ることになるであろう。（中略）

「下手だ」とか「悪い」とかいつて叱りつけて、児童の心に自己の悪い方面を印象せしめるような旧式の教育法は断然改めなければならないのである。と云って、下手のまま「これで善い」と慢心せしめるような教育法も失敗だといわなければならないのである。「非常に上手に出来たが、ここをもう少ししたら一層出来ばえがよくなるだろう。それ御覧、こうなるだろう。今度はここをもう少し注意してやって御覧なさい。きつとまだまだ上手になる。この子は少しでも善くないところはすぐ改める子だから、どれだけでも上手になる子だ。将来どれだけ天才になるか、私はお前を楽しみにしているのだ」こういうふうな言葉を使って、善くないところを改善することに歓びを見出すような誘導法を用いるのが最も好いのである。常に子供を批評するときには、確定的な言葉で、彼の将来を祝福してやり、子供の到達に親たちが望みをかけており、彼が到達することが真に親たちの喜びであることを、ハッキリと彼の心に感じられるようにしてやるが好いのである。

（新編『生命の實相』第22巻161～163頁）